

不埒な総合商社

（体験版）

その青年は会社と言う場にとっては違和感がある男だった。

180センチ以上あるモデルのような体型を黒いスーツに包み、整った顔立ちに、筆で書いたような切れ長の瞳の色香が凄まじい。

そこに縁取られた女のように長い睫毛が瞬くたびに、その色香がまき散らされるようで、周囲の人間はつい見惚れて胸を高鳴らせてしまう。

彼がその場にいるだけでその周囲の空間が静かになり、清廉な気配がたちこめ、しかし中心にいる人物は身体から色香をまきちらしているという、矛盾した雰囲気を抱えている。

しかし、彼は自らの仕事を完遂すること以外にはなんの興味もなく、女子社員のさりげないアピールにもそっけない。

時折派遣社員としてやってくる彼を心待ちにし、彼の入ったシフトを見て興奮する女子社員のなんと多いことか。

その様子に周囲の独身男性社員が恨めしい目をむけるのだが、自らとその青年との存在感のかけ離れ具合に打ちのめされ、もう嫉妬の対象にすらならなかった。むしろ、仕事ができて礼儀正しい彼の態度に、最近では頼りになる凄腕の派遣社員として一目置かれるようにすらなっていた。

「加々知（かがち）くん、なんだか変な画面が出てきちゃったよ！何もしてないのに、金額を要求してくるんよ！どうしよう！？」

メガネを掛けた瘦身の青年が、加々知と呼ばれるその麗しい青年に駆け寄り、作業机の前で膝を折る。

「何もしていなければそんな画面は出てきませんよ。また会社のPCで違法動画みようと思いましたね。そういう場合は、無視してさっさと再起動すれば何事もなくすみます」

「そ、そうなの？さっそくやってみるよ！」

瘦身の青年が自分の机に戻ると、若干化粧が濃い目な美人オーラをまとった女性が近づいてくる。

「加々知くんは何やってるの？」

「これまでのファイルの整理です。並べられているのを見たところ、単に押し込んで閉じているだけのようなので、項目別に分類しようと思ひまして」

「あら、そんな細かいこと・・・」

「尾畑さんはタイピングが得意でしたよね。お手数ですが、こちらの手書きのファイルを起こしておいでくれますか」

その言葉に、尾畑と呼ばれた女性は顔を赤らめて表情を輝かせる。

「名前、憶えていてくれたの？」

「はい、こちらにいるみなさんの顔と名前は全て覚えています。それでは、お手すきでしたらこちらをお願ひします」

途端にガツクリと肩を落とした尾畑の腕に、ドツサリとファイルの束を渡され、さらに尾畑は肩を落とした。

「ん？このPC、ウイルスソフトが常駐していないんですか？」

「ああ・・・ウィンドウズなら、デイフェンダーがくつついてくるから、必要ないかなーと思って・・・」
一番奥に座っている、恐らくこの場で一番上役であろう太鼓腹の男のPCに対峙し、加々知は目くじらを立てる。

「デイフェンダーだけでは阻止しきれないウイルスは山ほどあります。心もとないですから、ノートンやウイルスバスターをインストールすることをお勧めしますよ」

「で、でも、あれ高いじゃないか・・・」

「無料でも良いものがありますよ・・・おすすめはアバストですかね。検索してDLしてください」

「あ、ありがとう・・・」

両腕にファイルを抱えながら、加々知はデスクの前で頭を抱えている同僚が目につくと、足を止めて一緒に解決方法を探り、解決へ導いてゆく。

派遣社員とは思えない、その場を掌握したその存在感に、皆は圧倒され、同時にたしかかな信頼を抱いている。

困ったことがあれば

「加々知くん」

と呼べば、すぐに飛んできてくれるのだ。

「全く、任期が終わって、私がいなくなったらどうするんですか・・・」

そのため息を吐きながら、加々知は長い睫毛を瞬かせながら引っ張りまわされる。

「ほう、あの子かね・・・」

「そうだよ、どうだい？」

「いいんじゃない？あの子で」

「じゃあ、決定だね」

そんな加々知の働く姿を、かすかに開いたドアから怪しげに覗く男たちがいた。

（中略）

ゾクゾクと快感がせりあがり、背中が反り返ってしまい、隠しようのない快感の反応を表してしまう。

「あれ？どうしたの？急に胸を突き出したりして・・・もっとさわってほしい？」

「ち、違・・・んんっ・・・！」

慌てて拒否の言葉を出そうとしたが、再び胸を抓まれて声が詰まってしまう。

誰がどう見ても、スーツ姿の美しい青年は、性の快楽に翻弄されていた。

ローションをさらに垂らされ、ヌルつきを追加された肌を、男たちの無骨な手が滑りまくる。

薬が全身に回っているらしく、鬼灯の身体は普段よりも数段敏感になってしまい、全身ほぼ性感帯と化してしまっている。

胸を触られるもの辛いが、脇腹や腹筋に触れられる反応を隠すのにも精一杯だった。

「んんっ！んんっ！ぐっ・・・！き、気持ち悪いっ・・・！」

顔を紅くしながら拘束を解こうと、鬼灯は必死に力を込めた。しかし、感じやすい耳や胸を舐られるとたちまち力は抜けてしまう。

「それにしても、最高の手触りだねえ、君の肌は・・・」

「シックスパックも見事ですが、脂肪よりも筋肉の方が感じやすいですからね。ここなんて気持ちいいでしょ？」

そう言われて筋肉の筋をなぞられるだけで、性の愉悅がこみ上げてくる。一度触れられただけで放り出された下半身が疼きだし、鬼灯の吐息は紅く色づいていた。

上部は完全にシャツをはぎ取られていたが、腰回りの、まだズボンの中に挟まれている白シャツがローションに濡れて透け、白い肌を浮き上がらせる様が艶めかしい。

それが男たちの手が動くたびに翻るのだから、色香をまき散らしているに等しかった。

「毛が薄いなあ・・・エステとか通ってるの？」

「羨ましいですな、私なんて三日剃らなければ一気に真っ黒ですよ」

「くっ・・・」

微妙に気にしているところを突かれ、鬼灯は唇を噛む。男たちの言葉は腹立たしいが、いちいち反応して応えていれば眩暈がひどく、身体に力が入れられない。鬼灯は男たちの隙を狙って力を放出し、拘束を振り切ろうと試みていた。

（集中しないと、集中・・・）

しかし自分が思っている以上に鬼灯の身体は感度を上げていくらしく、指先の細かな動きまで拾ってしまい、ヒクつく身体を止めることができない。

「本当に反応がいい子だね、これは久々にアタリを引いたな」

「見目も麗しいし、すでに調教済みの身体なんて、我々の都合のいい事この上ないですな」

「いやあ、増田さんはさすが、審美眼がある・・・」

増田、と言われた中肉中背の男は皆の賛辞に笑い、鬼灯の首筋に指を這わせる。

普段の鬼灯の髪型なら露出しない場所だが、下界でサラリーマンに適していないという理由でバツサリ切った短髪では、防ぎようがない箇所を責められ、ビクビクと首が反ってしまう。

「ふふ、可愛い反応だ。声を堪えているのかね？思いつきり喘いでもいいよ？隣には聞こえないから」

「まあ、私たちとカメラには聞こえているけれどね・・・」

（か、カメラ？）

不穏な言葉を聞いて、鬼灯が首を巡らせると、部屋の端に三脚で立てられ、こちらを向いているカメラが目に入った。

（こ、こいつら全員殺す・・・っ！）

これまでの自分ではない自分の反応の全てをデータに焼き付けられているのかと思うと、顔から火が出そうなほどの羞恥が上がった。

その矛先は、自分を囲む男たちに殺意として向けられる。

この状況において異様に迫力のある睨みを受け、さすがの無遠慮な男たちも手を止め、一瞬困惑したように互いの顔を見合わせるが、一人が笑い出したところで空気は変えられてしまった。

「ははは・・・全く、年下とは思えない怖い目だよ・・・武道でもやっているのかな？」

胸の突起を抓んで再び啼かせようとしたが、一度殺意に目覚めた鬼灯には逆効果だった。鬼灯は自分に触れてくる男を睥睨し、すぐに触る手を止めさせる。

「うっ・・・これは、怖い怖い・・・」

そうやって男は鬼灯の身体から身を引き、一定の距離を置いて離れた。

鬼灯の威圧に戸惑い、互いに顔を見合わせている男たちを見て、鬼灯は直観した。

（今だ！）

両手に思いつきり力を込め、鬼灯は手首が軋むのを感じながら一気に拘束を引きちぎった。思わぬ鬼灯の行動に男たちは声をあげて後ずさりし、委縮しきっている。

(足も、解かないと・・・！)

一括りにされている両腕の拘束を牙で噛み切ろうとしながら、鬼灯は足元へと目を向ける。その直後、全身に頭が真っ白になる衝撃が襲い、波が引いた直後、鬼灯は再びベッドの上に倒れ込んでいた。

「全く、油断のならない子だよ・・・」

そう言って鬼灯の頭上で男が掲げた手の先には、棒状の黒い物体が握られていた。その物体の先端には目が眩むほどのスパークが断続的に放たれて、妖艶だった空間に一種の緊張をもたらしている。

一瞬何が起こったのかわからない鬼灯は、突然の衝撃と痛みによって身体を動かさなかった。

「あっ・・・ぐ・・・っ」

「用意しておいてよかったよ……。全く、油断のならない子だ。しかし気絶するレベルの電流なのに、まだかすかに意識があるんだね。全く、丈夫だよ」

スタンガンを閃かせながら、鬼灯の背後に回っていた男は鬼灯の眼前にその元凶を見せつけた。

(どこまでも、下劣なやつら……)

怒りがますます鬼灯に募ったが、いまだスタンガンの電流の衝撃で身体を動かせていない。

鬼灯が力を抜いている間に男たちは再び鬼灯の両手を拘束し、今度は簡単に引きちぎられないように三重の鎖でベッドの宮から吊るす格好で拘束した。

「反抗しようとした罰に、お仕置きしないとイケないね」

「そうですね、じゃあこれを使いましょう」

「さっきのスタンガンで興奮も冷めてしまったようですから、また温めてあげないとね」

そうやって男はバッグに手を突っ込むと、そこからウズラ卵大のピンクの丸い物体を取り出した。その物体にはコードが取り付けられていて、スイッチにつながっている。

(うっ・・・このゲスどもっ・・・！)

これから自分が何をされるのかを察した鬼灯は、再び怒りを湧き上がらせた。しかし、電撃のショックで身体が未だに痺れ、視界もくらくなり、まともに反抗できる状況ではなかった。

スイッチを操作すると、物体が小刻みに振動し始める。羽虫の羽音に似た音を部屋に響かせ、数個の物体が作動し、男たちがそれを手に、鬼灯の身体に迫ってくる。

「知ってるだろ？ローター・・・。使ったことある？」

「気持ちよくなるからね、声あげてもいいからね」

「誰がっ・・・んんっ・・・！」

そう言われて否定の言葉を投げかけたが、いきなり胸の突起にローターを押し当てられ、想像以上の感度に声を詰まらせてしまう。

（お、おかしい、こんなに感じるはずは、ないのに・・・）

ローターを当てられた時先に立つのはくすぐったさだが、今回はいきなり神経が快感だと認識し、鬼灯の肌を震わせた。

自分の身体の変化に戸惑いながら、すぐに訪れた快感の波に鬼灯は翻弄されてゆく。

「くっ・・・うっ・・・」

ヴヴヴヴ・・・と音を立てたローターが両胸の突起に押し当てられ、鬼灯は必死に声を我慢するしか抵抗の手段がなかった。

ローターの振動は快感神経を呼び起こさせるには強烈で、グリグリと抉られたり摩擦されたりすると、振動も伴って、一層鬼灯を感じさせてしまう。

身体の奥から湧き上がってくる熱が再び解放され、鬼灯は再び身体の昂ぶりを感じ始めていた。

（中略）

「まずは感度チェックしませんか？恒例のあれ、私大好きなんですよ」

「ああ、いいですよ。あれをこの子にできるなんて、ゾクゾクしますね」

（な、何をする気だ・・・）

視界がぐるぐるとまわり、眩暈が激しくなり、それに比例して鬼灯の身体は熱くなって、絶頂したばかりの自身すら、この状況だというのに再び反応し始めている。

人間の身体がここまで薬物に弱いとは思いましなかった。いや、おそらく彼らが使用したのは違法な薬物で、投与される側のことなど念頭にない強烈な物なのだろうが、ただの一般人にここまで追い詰められ、前後不覚にまで陥らされてしまうというのは、大失態だった。

「目隠しをするよ？こちらの方が、感度がよりあがるからね」

そう言われて再び視界を奪われる。頭を振ると天地が引っくり返ったような浮遊感を感じるほどで、鬼灯はろくに抵抗もできず再び目隠しをされてしまった。

「ローションがかかっていますけど、拭きましようか？」

「いや、このままで行こう。先で触ればローションも染み込まないだろうし」

「それでは・・・」

鬼灯は思わず生唾を飲み込み、次にされる狼藉を待った。

感じたのは、耳に受けたさらりとした感触だった。しかし、それだけで鬼灯の首筋までビクビクと快感電流が走ってしまうほど、その感触は甘美で、声を押し殺すのに精いっぱいだった。

「おお、感じてるね・・・」

「首がビクビクツとしたよ？ふふ、可愛いねえ・・・」

「君、今自分が何されているか分かる？」

耳元で再び気持ち悪くささやかれ、鬼灯は嫌悪感を感じながら首を反らせて男の唇から遠ざかる。

「く、下らないことを・・・！」

「当てたらやめてあげるよ。ちゃんと口に出して言わないと、イカせるまで撫で回すからね」

するとさわさわとした感触が一斉に全身を襲い、鬼灯は一瞬パニック状態に陥った。

その妖しい感触が、首筋、耳、鎖骨、胸、両指、腹筋、足の付け根、足指にまではない回り、決定的な快感としては一歩たりないじれたい愉悦に、鬼灯は身体を淫らにくねらせた。

「はっ・・・はぐ、うう・・・っ」

おそらくこの感触は筆だ。

八本の筆が鬼灯の美肌の上を縦横無尽にはい回り、感じさせにかかってくる。

筆先でさわさわと素早く擦る動きや、ローションをたっぷりまとった筆がする、と美肌の表面を撫でる。それで敏感な脇腹を通ると声が出そうになってしまう。

「さあ、正解はなにかな？」

男は筆の先を鬼灯の胸の突起に滑らせ、ひくつく上半身を眺めながら意地悪く問う。

(だ、誰が答えるか)

彼らの意図に乗って答えを吐こうものなら、それこそ思う壺だ。

身体中をはい回る筆の感触は耐え難いが、鬼灯の心まではまだ折れていない。

しかし、感度を上げられて目隠しをされた身体は、肌で感じる感触をより鮮明に感じてしまい、次にごを責められるのかわからない分、不安も手伝って鬼灯の意識を混乱させてゆく。

目隠しをされたことで感覚が研ぎ澄まされてしまい、薬物の底上げもあって、耳朶をなぞられただけで涎が出そうなほどの愉悅が込みあがってくる。

それが身体中をはい回り、筆先で緩く、筆全体を使って大胆に刺激され、足裏をくすぐられれば足の痙攣がとまらない。

「くっ……う……うあ……っ」

漏らすまいと思っていた声が口の端からこぼれ、鬼灯は悔しさを噛みしめる。しかし今鬼灯の身体に巻き起こっている愉悦は、到底我慢できるものではなかった。

「本当に綺麗な身体だねえ・・・加々知くん」

「一体どれだけの男に犯されてきたんだい？興味深いなあ」

「こんなに慣れきった男の子で遊ぶのは初めての経験ですから・・・私たちの手に終えるかどうか心配ですな」

「なに、そこはハーブで感度を爆上げしましょう。それを使えば一発です」

筆先が鬼灯の胸の突起をくるくると円を描くように撫で回し、鬼灯にこれまでにない快感を染み込ませてくる。

「っ・・・あ・・・ああ・・・」

限界を超えた愉悦に鬼灯がとうとう艶声をあげ、男たちはそれを嬉しそうに快哉した。

「やはりここが感じるんだね、エロいなあ、君……」

「こちらは大きいので全体をこね回してあげるよ。これでイクかな？」

右の突起は巧みな筆さばきで責められ、左の突起はローションを含んだ刷毛のような大きい筆で大胆に回転させられる。

「あああ……っ！うあ、やめ、んんっ……！」

鬼灯を拘束している鎖が高い金属音を奏で、快感を散らすために鬼灯はなりふりかまわず身悶え続ける。しかしこの程度の抵抗では男たちの筆を止めさせることはできず、鬼灯はその快感に酔うしかできなかった。

筆は両足のきわどい部分にまでおよび、反応している自身に触れるか触れないかの距離で接触してくる。すぐそばに自分を責める道具の気配を感じ、鬼灯自身の先端から羞恥の先走りがこぼれた。

「気持ちいい？すごい悶えようだね、そんなに感じるだ」

「か、感じてなどいません！」

「でも、乳首をさわさわすると言葉を詰まらせるのはどうして？」

「あぁっ・・・くっ・・・！」

とろ火のような快感を受け続け、何分だっただろうか。

鬼灯の体中からは匂い立つ汗が吹きだし、吐く息は熱く、胸の突起は充血し、鬼灯自身もすでに天を向いていた。

しかし、男たちは鬼灯が回答するまで筆責めをやめようとしなない。

「んんっ！んんっ！んんっ！・・・はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・」

肩で息をして快樂を逃そうとするが、もはやその程度で散らせられる快樂ではなかった。

身体中の肌が発情し、雪のように白かった美肌が桜色に色づきはじめ、それを目視している男たちはますます増長の気配を膨れ上がらせる。

「この用具で撫でられて感じている加々知くん、とつても色っぽいよ・・・」

「でも、そろそろ答えが欲しいなあ・・・加々知くんの口から」

「だ、誰が・・・こんなもの、感じません」

しかし、男たちの筆使いはずっと同じ調子で、全くそれが強められることはない。

快楽の種火をどんどん体内に追加され、鬼灯の敏感すぎるほど敏感になった身体は決定的な快感を欲して激しく疼き始めていた。

ヌルつく筆が鬼灯の脚の付け根を通り、際どい部分を通過してゆく。それだけで腰が細かく痙攣し、もうすでに快感を押しとどめられなくなっている。

「そう言えば、ここまにはまだ触れていなかったね」

男の不安な声が耳に飛び込むと、下半身の性感帯に甘美な感覚が走り、鬼灯は大きく腰を上げてしまう。

「ううつ・・・！」

「は、凄い反応だねえ。タマでもそんなに感じるかい？」

そう笑いながら、男は筆の動きを止めず、鬼灯の陰囊を筆で撫で回しづつける。

自身ほどではないがれっきとした性感帯を責められる。しかもそれが焦らされた挙句の暴挙だったため、鬼灯は構えることもできず、無様にも快楽の反応を返してしまった。

「本当に綺麗なタマだねえ・・・。しかし、少し張りすぎじゃないかね？」

もう一本陰囊をくすぐる筆が増え、鬼灯を快感で追い詰めてゆく。

両胸を責めている筆も健在で、上半身と下半身で感じる焦悦に、どんどん身体は追い込まれてゆく。

「ふふ、本当はチンポから精液を出したくてたまらないんだろう？ここはもうパンパンだ・・・。筆越してもわかるよ、淫乱だなあ・・・。」

『淫乱』と言われ、鬼灯は一瞬理性を取り戻した。

これまで自分を凌辱してきた男たちに何度投げかけられた言葉だろうか。その言葉を耳にするたび、鬼灯は屈辱感と羞恥心で胸がはりさけそうになり、それはいいようなない悲しみにむかう。

(こんな身体になったのは、自分のせいではないのに・・・)

しかし、そうなることを見越してはるか昔に神々の精を受ける儀式を受けたのだ。その後遺症は想像以上だったが、そんな自分を擁護するたびに胸が同時に痛む。

しかし鬼灯のそんな複雑な心情など知るはずもなく、筆はどんどん鬼灯を追い詰めてゆく。さわさわとした感触が脇腹をなぞり、首筋を通って、ぞくぞくと隠しようなない愉悦がこみ上げてくる。

「そろそろ、ここにも欲しいんじゃないかね・・・？」

そう言って筆の底で、反応しきって先走りを零している鬼灯自身を軽く突く。

「んぐ・・・っ」

それだけで腰の奥にまで快樂の痺れが伝播し、鬼灯は下半身を震わせる。

「さあ、今君の身体をはい回っているのは何かね？答えれば、これで思う存分撫で回してあげるよ？」

「ローションを付けて、八本で一斉にね・・・」

(い、一斉に・・・?)

そう言われ、鬼灯の胸の奥がゾクンと脈動した。

しかしすぐにそんな自分を否定し、目隠しの裏から男たちを睨みつける。

「こんなっ・・・薬を使って・・・縛って・・・卑怯・・・極まりないです・・・」

〔中略〕

両膝の間に鉄パイプが挟まれているので、足は閉じられず、貞操帯に包まれた自身を隠すこともできない。

「色っぽいねえ、加々知くん」

「スーツとシャツがいいですね・・・これで、昼間働いている時も、この姿を連想することができる」

「しかしお尻が半分隠れてしまいますね。後ろだけ、ハサミで切ってしましましょう」

「やめっ・・・！」

再び冷たい鉄の感覚が鬼灯の肌をはい回り、ジャキジャキという音とともに拘束されている両腕ぎりぎりまでを切り裂かれ、裸の背中が露見させられる。

上半身も激しくはだけられ、肩口が完全にさらけ出され、拘束されている腕まで引き下ろされる。

「ふふ・・・このシャツの間から覗くSMペニスこそそりますね・・・」

そう言うと、男は貞操帯を巻き付けられた鬼灯自身を掴み、上下に擦って裏筋に配置された粒を連続して転がし始める。

「んううつ・・・！やめろつ・・・！」

絶頂するには遠い快感だったが、腰が震えるほどには強い快感を感じてしまう。はしたない声をあげそうになる自分を叱咤し、鬼灯は必死に周囲の男たちへ睨みを効かせた。

「一回イツちやった子にそんな風に睨まれてもねえ・・・最初と比べて随分顔の表情が可愛くなってきたよ？」

「だ、だまれっ！」

鏡がないので鬼灯には気付くはずもないが、白い頬は紅く上気し、首元から熱っぽい色香を立ち上らせて、肌蹴られた両胸の突起は充血して硬くなっている。完全に快楽に支配された姿で睨まれても、説得力に欠ける、と言いたいのだろう。

「まだまだ威勢がいいなあ……まあ、グズグズ泣く子より、こういうののほうが私は好みですけれど……」

「泣かれると、心が痛みますからなあ」

(よく言うっ……!)

こいつらはどれだけの被害者を出してきたのだろうか。解放されて閻魔殿に戻ったら、すぐさま罪状を調べてやろう、と鬼灯は恨みを立ち上らせて、奥歯をかみしめる。

「じゃあ、これを使おうか」

鬼灯の目の前に、奇妙な器具が差し出された。

それはシリコンのような質感で、逆Tの字をしているが、最も長い部分が奇妙にカーブを描き、先端がさらに曲がって膨らんでいる。その根元で左右に生えている部分は細く、やはりカーブを描いていて指をひっかけるような丸い穴が付けられていた。

「なんっ……ですか、これっ……」

「あれ？知らない？エネマグラ。君ぐらい慣れてるなら、知らないはずないと思うんだけどなあ……」

エネマグラと呼ばれた奇怪な器具を鬼灯の口にねじ込もうとして、首を激しく振ってそれを防ぐ。

「もしかして、加々知くんて凄く敏感なだけで、経験はあんまりないんじゃないの？」

「アナルで遊ぶなら、パールとエネマグラは外せないでしょう」

「一方的に犯された？でも君、体格いいから無理矢理はなさそうだね。脅されて犯された？それとも、複数に輪姦されたとか……」

「う、うるさいっ……どれも違いますっ……！」

男たちの言葉が耳障りで、鬼灯はなんとか拘束から逃れようと身体を激しく揺さぶったり体重を掛けたりにして縄を千切ろうとしたが、拘束された限られた動きでは引きちぎるまでの力を掛けることはできず、ただ悪戯に縄をギシギシと軋ませるだけだった。

「根元の締め付けを緩めてもいいかね？」

「いいですよ。気の強い加々知くんが、出しっぱなしになるところを、みんなで見ようじゃありませんか」

一人の男が鬼灯自身を手に浴え、根元を縛っていたベルトを緩めにかかる。圧迫感がなくなり、鬼灯が一瞬油断した途端、先端から透明な液が零れた。

「ああっ・・・！」

「なんだ、もうオモラシかね？まだ責めていないのに、ほんとイヤラシイ子だ・・・」

羞恥の瞬間をまたも見られ、鬼灯は男をきつく睨む。

「では、挿入しましょうか」

エネマグラと言われた奇妙な物体にローションがふんだんに添付され、鬼灯の背後に回される。

「ぐっ・・・そんなもの、挿りません・・・！」

「大丈夫だよ、もう加々知くんのお尻はこのまま即ハメしてもいいぐらい緩んでいるからね。それをしないのは、いろいろな玩具で可愛い君と遊びたいからだよ？」

挿入しないのを感謝しろ、とでも言いたげな口調に鬼灯は怒りを感じたが、秘孔に再び指を突き入れられて感情が霧散した。

「ローションが垂れてるよ・・・エロいなあ。ほら、身体のを抜くんだ・・・」

「くっ・・・！」

鬼灯は下半身に力を込め、エネマグラが挿入されないように反抗する。

「あれ？仕方ないなあ・・・」

男たちは互いに目配せし合うと、三人が鬼灯の周囲に取り巻き、体中を手で責め始めた。

「んんっ・・・！」

胸の突起を爪でカリカリと引っ搔かれ、ゾクゾクと快感が走る。

外に晒された背中のかぼんだ筋を上下になぞられ、くすぐったさと、それとは違った感覚が上半身を刺激する。

貞操帯に巻かれた自身を掴むと、緩く上下に擦って粒を転がし、鬼灯を性的に感じさせた。

「ふふ、本当に滑らかな肌触りだなあ・・・何を食べていたらこんな美肌になるの？」

「まるで十代のような張りの良さだね。しかも敏感だし、いう事ないなあ・・・」

耳とうなじを舌でしつこく舐められ、感じたくないのにジンジンと愉悦が上ってくる。

「はっ・・・うう・・・っ」

身体中を弄ばれ、身体の緊張がとかれた隙を見計らい、鬼灯の秘孔にエネマガラの先端が挿入された。

「あああっ！」

全体がシリコンで出来ている淫具は、ローションの滑りも手伝って強い抵抗もなくぬるぬると洞内へと侵入していった。

「あぐっ！あああ！抜けっ・・・！いやだ、あっ！ああっ！」

腰を振って淫具の挿入を阻もうとして、洞内に挿入された淫具から快楽が湧き上がってくるのを感じてすぐに動きを止めた。
ぬるぬるとした感覚と敏感な内壁を押し広げる圧迫感が、認めたくないが完全に悦になっている。

「はあああ・・・っ」

エネマグラが完全に根元まで洞内に滑り込み、秘孔から上下に引っ掛かりと、指を通すらしい輪っかが飛び出している。

淫具の底には金属の丸が付着していて、不穏な雰囲気を出していた。

「どうだい？挿入しただけで気持ちいいだろ？」

「うあっ・・・！き、気持ちよくな、な、いっ・・・！」

しかし鬼灯は洞内で感じる決定的な快感に全身を戦慄かせていた。

淫具の先端の曲がった部分が前立腺を押し、常にゾクゾクとした快感が腰に押し寄せてくる。

「ほらほら、こうするともっと気持ちいいだろ？」

男が輪っかに指を通し、小刻みに上下へ動かし、洞内へ振動を送り込む。

「うあっああっ！あっ！ああああっ！」

前立腺に振動が伝わり、洞内も内から無数の舌で舐められているかのような感覚が沸き起こり、嫌なのに淫具を強く締め付けてしまう。

淫具を締め付けると前立腺が強く刺激されるが、力を抜くと男の指で振動を送られる。

洞内に余すことなくびったりと張り付き、声をあげるだけで振動が発生し、気持ちよさが止まらない。

「ああっ、抜け、抜いてっ……くださっ……！」

鬼灯の身体がブルブルと震え、開かれた両足の根元にある自身が強く反応している。

「ふふっ、ギン勃ちだねえ……。エネマグラを使うと、誰でもこうなるんだよ、恥ずかしがることはない。そして……」

鬼灯の先端から先走りの淫液がトロトロと零れ、ベッドのシートにたまってゆく。

「んぐううう……っ」

「いい眺めですね……。エネマで責められて、先走りをダラダラ垂らす、この姿が、私は大好物なんですよ！」

そう言って男は何度も角度を変えてシャッターをきる。

(こ、こんな恥ずかしい姿、撮るなっ……！)

大声を上げたかったが、もはや声をあげるだけで洞内が振動し、快感を感じてしまうので、鬼灯はおとなしくしているしかできなかった。

「エネマグラは人間工学に基づいて作られているからね。気持ちのいい部分、全部刺激されて、本当にいいだろう？このまま挿入しつづけていてもイケるけど、僕らは加々知くんが激しく乱れるところをもっとみたいんだよ・・・」

「ちよつと辛いかもしれないけど、いくらでもドライでイッていいからね・・・」

エネマの輪に指を通してグポグポと操作していた男が指を離し、根元にあった金属の丸を押した。その直後、洞内全体に腰が蕩けてしまいそうな振動が走り抜け、鬼灯はあまりの刺激に声をあげてしまう。

「あああああああっ！」

ヴイイーっつと音を立ててエネマが振動し、洞内の性感帯の全てに食い込んで、それらすべてを振動させてくる。

その快感の凄さは意識がかすむほどで、とても黙って刺激を受け続けられるような生易しさではない。

「んんっ！んぐっ！ああああ！あっ！や、だ、あああああ！」

鬼灯自身から先走りが次々とあふれ出し、まるで緩く射精しているかのような状態だ。

男がその先走りの粘液を手に乗ると、その指で鬼灯の胸の突起を弄び始める。

「んぐっ・・・んん、ああ、やめ、あああ、ああああっ！」

（い、今はそんなところで感じている場合ではないのにつ・・・！）

（中略）

「うっぐっ……！！」

絶頂の波をやり過ぎ、未だジンジンと疼き続ける上半身を堪え、鬼灯は首を垂れ、肩で息をする。

「両方でイッたかな？合計六回だから、あと四回で終わらせてあげるよ」

（お、終わるまで四回も……！？）

折り返し地点を過ぎたというところだが、鬼灯の性感はこれ以上の快感を受け入れるには限界で、指先でも触れられたくないほど、肌は鋭敏になっていた。

「はあ、はあ、も、これ以上……やっても、無意味……ですっ……私は、何も感じなくなっています……」

男たちの興味を反らすため、鬼灯は詭弁を用したが、男たちの笑みは収まらなかった。

「そうかい？じゃあ、新しいハーブを使おうね・・・」

「っ！や、やめてください！」

しかし鬼灯の抗議の声も無視し、男たちは新たなタオルを用意して、そこに怪しげな粉を混ぜ合わせると、そのまま包んで鬼灯の口と鼻をふさいだ。

「んんんっ！」

「今度のは特製だよ・・・。身体の中の性感を極限まで高めて、天国を見せてくれるんだ。でも、すぐ意識が飛んじゃうからなかなか使わないんだけど。でも、加々知くんなら多少耐えられるよね」

とんでもない効能を聞かされ、鬼灯は自ら墓穴を掘ってしまったことを悔ながら、必死に息をひそめ、成分を吸い込まないように努めた。

（吸わない、絶対に吸わない・・・！）

本当は絶頂したばかりなので、もつと激しく息を乱したところだが、それをなんとか耐える。心臓の音が耳にまでドクドクと聞こえ、耳の奥がキーンとする。

だが、そんな鬼灯の努力もむなしく、男たちは身体のおちこちで責めを続けていた。

「50回扱いたから、今度は新しいエツグだよ……相当気持ちいいのに、イケなくて悔しいね？でも、容赦しないよ……」

そう言って男は新しい種類を取り出して、また鬼灯の目の前で裏返して中身を見せた。

「ほら、今度は一番人気のあるウェイビーだ……。中が波のようにならねって、文字通り波のように快感がおしよせてくるよ？」

その白い物体には幾重にもエッジの効いた輪が重なり、根元から先端までをびっしりと覆っていた。男は鬼灯に見せるとすぐに元の状態に戻し、中へローションをふんだんに垂らし始める。

「加々知くん、でもこっちがやっぱり、一番気持ちいいだろ？」

そうやって洞内に入っているエネマをグリグリと抉られ、腰から背筋にかけて快感電流が走り、鬼灯は思わず息を吸い込んでしまう。

(あつ、いけないっ・・・！)

しかしそう思ったときにはもう遅かった。

息とともに焦げるような薬草の香りを嗅いだ直後、頭がくらくらし、意識が半覚醒状態に陥り、身体がフワフワと浮いたような感覚になる。

それと同時に、体中の肌を針で軽く突かれるような感覚が広がり、動く、連動してその刺激が強くなっていくのだ。

「ん・・・ふっ・・・！」

息もそろそろ限界を迎え、まともに意識も保てなくなった鬼灯は、次第に呼吸を乱し、少しずつ凶悪な成分を吸い込んでゆく。

「ほら、気持ちいい瞬間だ・・・」

鬼灯自身をエッグで責めている男が、紅く充血した先端へと淫具を食い込ませる。ぐちゅ・・・とローションの流れる音が響き、鬼灯自身を包み込んだ直後、強い締め付けと波のようなギザギザの輪が食い込んで、そのあまりの快感に鬼灯は激しく呼吸を乱し、息を荒げた。

「んふうううっ！んん、んっ！んんんんっ！んぐっ、ふう、んんーっ！」

自身を通してゾクゾクと快感がせりあがり、あまりの快感に目の前が白く明滅する。さらに淫具を上下にゆっくりと扱かれ、中の構造が鋭敏な鬼灯自身の表面を抉り、息がとまりそうな愉悦が押しあがってくる。

「んんんっ！んんーっ！んっ！んんんっ！」

もう息を整えることなどできるはずもなく、鬼灯は口に当てられたハーブの成分をいやというほど吸い込んでしまった。

一呼吸ごとに頭がジンジンと響き、快感に脳が浸食されるような感覚を覚えながら、何度もその異質な体感を受け入れてしまう。

ようやくタオルが離された時、鬼灯の開けられた口とタオルの間に興奮の唾液が一筋つながっているほどだった。

「はあ、はあ、はっ・・・は、ああああ・・・っ」

強力な催淫剤を吸い込んだ鬼灯の身体は紅潮し、吐く息も荒々しい。すでに身体に快感を受けている鬼灯は、薬を吸い込んだ途端に、明らかに刺激が一段階も二段階も上がったのを感じ、空気の流れだけで肌が震えるほど性感は鋭敏になり、鬼灯は快感を貪ることしか考えられなくなってしまった。

「あっうう・・・うっ・・・」

淫具で自身を責められ続け、腰がビクビクと跳ね上がり、それが洞内のエネマにも伝わって下半身が愉悦でまみれてしまう。

「ははは、すごい反応だ。今度はキスさせてくれるかな？」

男の手が喘ぐ鬼灯の顎にかかり、自らのぼつてりとした唇を鬼灯の唇に重ねた。

「ふふ、柔らかい唇だねえ・・・」

そう言うときさらに深く口づけし、口腔へ舌を侵入させて鬼灯の舌と自らの舌を絡める。

「ん、ふ、んん、んっ！んんーっ！」

首を左右に振り、鬼灯は男の唇から逃れようとする。しかし、意識が半分しか働いていない状態では身体を動かすことも碌にできず、最後まで男の唇を振り払うことはできなかった。

「ふは、はあ、はあ、はあ・・・」

激しく喘ぐ鬼灯の唇を未練がましく舐めながら、男が満足そうに笑う。

「さすがにその薬はよく効くね。今まで一回しか使ったことないけれど、前は危なかったけれど、今回はうまく作用したようだ」

「ええ、前の時は、吸った瞬間に倒れましたからね。びっくりしてたたき起こしたら、色気狂いになっていて、私たちの方がへばるぐらい求められましたから・・・」

「今回は玩具をたくさん用意してるし、加々知くんはまだ意識があるようだから、たくさん楽しめますね」

（本当に下種なヤツら・・・）

一体これまでどれほどの被害者を出してきたのだろうか。それを思うと、現世の人間は鬼以上に傲慢で残酷だ。

「よし、じゃあ、次の遊びをしようか、加々知くん」

男はエネマの出っ張った輪に指を嵌めると、一気に下へ引き下ろした。

「あああああつ！」

ズルズルと内壁を擦りながら淫具が引き抜かれ、鬼灯はようやく肛悦から解放される。しかし、こちらの刺激がなくなると前の快感を強く感じてしまい、エッグで弄ばれる自身の愉悦で頭は回らなかった。

「この子ならこの器具でイケるかもしれませんね」

「まさか、そこは調教されていないと思うが・・・イッたら凄いなあ・・・」

（中略）

ようやく身体を責める刺激が全てなくなり、鬼灯は安堵の吐息と共に、これまで絶頂に次ぐ絶頂で碌にできていなかった呼吸も再開させた。

「凄まじいね・・・一時間放置されて、気絶しなかったのは君だけだよ・・・。ああ、気絶したくてもできなかったのかな？」

「本当にどこまでも私たちの期待に応えてくれる子だ・・・」

「どうだい？加々知くん、一時間イキツぱなしの感想は？」

男が鬼灯の顔に耳を寄せ、問いかける。

「う・・・はあ、はあ・・・こ、殺すつ・・・」

その言葉を聞いた瞬間、部屋は一瞬静まり返ったが、すぐに男たちの爆笑で騒がしくなった。

「そ、そうかい、殺すかい？」

「すごいね、ここまでされて、またそんな気持ちがあるんだ！」

「さすがだよ加々知くん！まだまだ責め甲斐があるね！」

「こんなに抵抗心の強い子は初めてだ・・・さあ、我々の力だけで陥落させられるかね？」

すると男たちの背後に影をひそめていた背の低い人物が身を乗り出した。見た目は背が低く痩身だが、異様な雰囲気を持った男だった。

「ほお、この子が横田さんたちの言っていた子ですか？いやあ、色男ですね」

そういうと俯せだった鬼灯の身体を引き、横倒しに体勢を返させた。はあはあと荒い息を付く鬼灯の顎をとり、喘ぐその顔を眺めながら、背の低い男はその身体に掌を這わせてゆく。

横田たちのように遮二無二撫で回すのではなく、快感のツボを押さえた、蜘蛛のような動きで鬼灯の美肌を撫で回す。

「これは・・・肌の触り心地のなんと良いこと・・・まさに極上の獲物を見つけましたね」

その掌が鬼灯の腰にかかったとき、男は根元が縛られている鬼灯自身に気が付いた。

「これは、一時間前からずっとこうですか？」

「そうなんだよ。射精しまくと、あとで楽しめなくなると思ってたね」

「なるほど・・・とりあえず、ベルトを取って良いですか？」

男たちの承諾を得て、背の低い男は鬼灯の射精を止めていた根元のベルトを緩め、取り去った。その直後、鬼灯自身の先端からどくどくと透明の淫液が吐き出され、ベッドに水たまりをつくった。

「ううっ・・・」

「ふふ、ずっと縛られたまま刺激され続けた後は、解放されてもすぐには射精しないものです。その証拠に、まだ硬いままでしょ・・・？」

紅く染まった鬼灯自身は、未だに先端から先走りをトロトロとこぼしながら硬く屹立している。

「それでは、これから思う存分加々知くんを射精絶頂させてあげようじゃないか・・・」

そして男たちはスーツを脱ぎ、次々と裸になると、ベッドの上でぐったりとなった鬼灯に近づき、背中で拘束していたベルトを解いて自由にした。

鬼灯の汗を吸ってずっしりと重くなった、未だ残されていた両腕のスーツとシャツも脱がされて完全に全裸にさせられる。

しかし鬼灯には抵抗する様子はなく、力ない様子ではあはあと荒い息を付き続け、首も起こせない状態だった。

「身体中が汗まみれだから、とりあえずお風呂に入ろうね・・・」

そう言って二人の男に抱えあげられ、浴室へと運ばれる。

せつかくの逃げるチャンスなのに、鬼灯の意識はほとんど霞がかり、四肢はダラリと力なく、何の意思もかんじられなかった。

風呂場に続く扉を開けると、そこは浴室とは思えないほどの広さがあり、部屋の中央や隅にいかがわしい拘束具や道具が設置されていた。

男たちは中央に置かれた分婉台のような拘束椅子に鬼灯の身体を乗せ、両腕を頭の上で一括りにして鎖で引つ張り、両足は大胆に開かされて左右ともども足首をエナメルのベルトで固定され、羞恥の恰好をとらされる。

「うっ・・・うう・・・はあ、はあ、はあ・・・」

まだ息の収まらない鬼灯は、自分の状況が変わったことに気づきながらも何の抵抗もできず、ただ男たちにされるがまま、身体を開くしかなかった。

「さあ、とりあえずシャワーで汗を流そうか・・・」

三本のシャワーノズルが鬼灯の美肌を打ち、白い表面の上を水流が流れてゆく。

「このあたりは汗をよくかくからね、しっかり流してあげるよ」

そう言つてシャワーの粒が鬼灯の胸の突起を連続して打つ。これまでいやというほど絶頂させられたというのに、鬼灯の身体は未だに快感らしい反応を返し、上半身をヒクつかせる。

「横田さんのお話では、薬を使つてから一時間ほどだとか……今が一番体中に回っているところですね。シャワーの刺激でも十分イクと思えますよ」

「ふふ、ますますエッチな身体になつてるんだねえ、あれだけイッておきながらねえ……」

「チンポにシャワーを当ててやってください。たぶん射精しますよ」

「本当かね！久々に加々知くんの射精絶頂をみんなで見ようじゃないか！」

すると二本のシャワーノズルが左右に開かれた脚の付け根に向かい、未だ精を放たず固まったままの鬼灯自身を水の粒で攻撃する。

「んんんっ……！」

「責められすぎて、強い刺激だと無感覚になっているんでしょう。シャワーの刺激ぐらいが、丁度いいとおもいますよ」

「そうかい・・・ほら、遠慮なくイキたまえ・・・」

シャワーの水を上下に動かしながら、鬼灯自身が集中攻撃される。

「あつ、あああつ！はあ、あああつ・・・！」

すると鬼灯の腰が大きく痙攣し、自身が軽く痙攣すると、先端から勢いよく白液を吐き出した。

「あああああつ！」

まるで石弓のようにその勢いは強く、バシヤッと一瞬で周囲の壁にまで到達し、絶頂の凄まじさをうかがわせる射精だった。

ようやく欲を吐き出せた鬼灯は身体中を弛緩させ、拘束具に沈み込む。しかし、鬼灯自身は未だ反応しきったままだった。

「一時間お預けを食らって、さらにタマも責め続けられていたんでしょう？二度や三度の射精ではとまりませんよ、この子……」

瘦身の男が鬼灯の肌を撫で回し、その滑らかなん感触を楽しみながら、男たちに発破をかける。

「このままシャワーで、ずっとイカせて平気かね？」

「どうぞどうぞ……さっきの射精で感覚が幾分が戻ったでしょうから、手で扱いてあげても、射精しますよ？」

「うっ……くっ……」

（人の身体を、好き勝手に……）

ようやく射精できたことで鬼灯の意識が若干透き通り、ようやくまともな思考能力が戻った。しかし、体中を打つシャワーの感覚と、肌の上をはい回る男たちの手が、嫌なのに感じてしまつて、気を抜くとすぐ快楽に流されそうになつてしまう。

「じゃあ、もう一回シャワーで射精だ。気持ちいいね、加々知くん」

く中略く

「あれあれ、また気絶しちゃったねえ。だめだよ加々知くん」

再びシャワーを顔にかけられ、眉間をヒクつかせながら鬼灯は意識を取り戻してしまふ。

「はあ、はあ、はあ、はあっ」

(そ、そんな、おかしい、あれほど激しく極めたのに、治まっていない・・・！)

鬼灯自身は力を持ちづつけ、さきほど盛大に射精したばかりだというのに、再び快楽を欲して激しく反応を返していた。

「イッたばかりなのに、すごいねえ・・・僕は尿道責めを見るのは初めてだけれど、こんな風になるの？」

「ええ、ずっとイキたい感覚が続いて、射精の快感も凄くなります。これは数日間続きますよ」

(そ、そんなことが・・・！)

これほどの熱を湛えたままでは、日常生活もままならない。人間の身体で受ける尿道責めの凄まじさに、鬼灯は戦慄した。

「大丈夫だよ加々知くん。出勤中はちゃんと我々がサポートしてあげるし、プライベートでも面倒をみてあげるから安心してね」

「くっ・・・うう・・・！」

（誰がそんな言葉で安心するかっ・・・！）

「四六時中ギン勃ちかあ・・・どんな刺激を受けても気持ちよさそうだね・・・」

一人の男が鬼灯の両足の間に割って入ると、その汚らしい舌で穢れない器官を舐めはじめた。

「いっ・・・！や、やめ・・・！」

自分をこんな目にあわせている相手に屈辱的なことをされているのに、身体は快感と受け止めて激しい愉悦を感じてしまう。

生暖かい舌が表面をなぞり、息が詰まりそうな快感がせりあがり、鬼灯は悔しさに歯をギリギリと噛みしめた。

「私は繊細だからね・・・舌ですっと舐めたかったけど、萎えられたらショックだろ？でも、今なら気持ちよくなってくれるよね？」

鬼灯が言葉で答えるまでもなく、身体は正直に反応をかえす。先端から先走りの淫液をとぼとぼと零し、男の拙い舌の動きにも十分快楽を貪ってしまう。

(感じたくないのに・・・)

「男のチンポなんて、普段は見たくもないけれど・・・加々知くんのは綺麗で、初めて見たときからずつとこうしてみたかったんだよ・・・ほら、気持ちいいかい？」

「はあ、よ、よく、ないっ・・・！」

そう言った矢先、先端をジュウと吸われて腰の奥が快楽で痺れて声を詰まらせてしまった。

「嘘はよくないな・・・。まあ、射精するまで舐めて続けてみようか」

「いいですね、私も加々知くんのチンポをしゃぶってみたいです」

「本当に、子供のように綺麗ですものね」

「稀にいるんですよ、こういう綺麗な子・・・でも、容姿まで整っている子は彼が初めてです」

勝手な言葉が飛び交っているが、鬼灯の頭には自身で感じる快感しかない。何の技巧もない男の舌だというのに、恐ろしいぐらい感じてしまう自分に怒りが湧きながらも、刺激を受けるたびにその感情はトロけてゆく。

「んぐっ・・・ああ！あっ！あああああ！」

激しく吸い上げられ、さすがに強烈な快感を感じ、鬼灯は射精の予感を感じて声をあげた。

「はは・・・実に気持ちよさそうな声だ・・・可愛いねえ加々知くん・・・」

「しかし、よくこんな子を見つけてきましたね。たぶん、ケツの具合も良いでしょう。久々に興奮できそうです」

「そうなんですよ。イクときは、エネマをつぶしそうなほど締め付けますからね。横田さんの審美眼を褒めてあげましょう」

(くっ・・・こんなことまでされて、犯されるなんて・・・！)

薄々予感を感じていたが、この者たちはやはり鬼灯を犯すつもりらしい。不能者たちの歪んだ遊戯だと思いたかったが、時折垣間見える男たちのズボンに、確かに反応を返していた。

「んんっ・・・！ぐっ、はあ、はあ、はあ・・・」

「イキそうですね。小谷さん、もっと強く吸ってあげてください」

鬼灯自身を責め続ける男が音を立てて吸い上げを強めた瞬間、鬼灯の腰が緊張し、両足を引き絞り始めた。

「んんっ、あ、いやだ、あああっ！」

「そう言いながら、顔がトロけてるよ・・・本当に色っぽい子だ。可愛いねえ・・・」

「乳首も責めてあげようね」

「あとで全身が敏感になるツボを射してあげよう。もっともっと気持ちよくなれますよ」

「い、いやだ、ああっ！あああ！」

（ううっ、我慢できない、極めそうだっ！）

極限の状態で堪える鬼灯の顎をとり、男が喘ぐ口に自らの剛直を突き入れた。

「んぐううっ！」

「してもらってるんだから、お返しにしないとね・・・ほら、しゃぶるんだ・・・」

先走りをふんだんに垂らした男の体液が舌の上を伝い、鬼灯は嫌悪を感じたが、下半身の快感で意識が全て占められ、絶頂するために呼吸を確保しようと、舌が動き始める。

「おおっ・・・！すごい舌づかいだ、これは、随分積極的だなあ・・・」

「やっぱり小慣れてるね、加々知くん・・・」

(う、うるさい・・・)

これまで数々の経験を得てきた鬼灯だが、口の中に剛直を入れられると早く済ませたくて無意識に舌を動かしてしまうのだ。

（中略）

そうやって鬼灯の唇をなめてくる。いよいよ嫌悪感が高まって、鬼灯は必死に首を振って男の舌から逃れようとしたが、前髪を掴まれて無理矢理口づけを強要される。

「んん、ぐっ・・・！」

「おっと危ない・・・」

舌が入ってきたら噛みきってやるつもりだったが、それを感じかれて瘦身の男は顔を引いた。

「お前、処女だろう」

その指摘に鬼灯は妙な気分になった。確かに人間のこの身体は処女だ。薬を飲むたびに身体の内から変わるのだから、経験的な意識をのぞけば、身体は処女と言ってよい。

「そのわりには、身体が柔らかいし、経験もあるなあ・・・。変なんだよな・・・。なんだか、身体を入れ替えているカンジだな」

男の言い分は的を射ていて、色事師のプロというのは伊達ではないな、と鬼灯は感じた。

「不思議だよな。お前・・・人間・・・か？」

その言葉を耳にし、鬼灯は黙り込む。正体をばらしたところで、人外を抱けると喜びそうだし、正直に真実を言ってもこの男が信じるとも思えなかった。

「まあ、そんなことはどうでもいいか。それにしても、あんなヤツらに簡単に捕まっちゃうなんて、油断がすぎるなあ・・・」

それは自分でも思っていたところだったので、痛いところを突かれた不快感に、鬼灯が眉をひそめる。しかし、まさか拘束されてこのような状況に合わされるとは思いもよらなかった。

いや、以前鬼だと呼ばれたとき、数人がかりで輪姦されそうになったことがあったが、怪力でやり過ぎ、無事に帰還したことがあった。

「しかし色男だな。身体は開発され続けて、夕チに破瓜をお預けされているのか？」

「違います・・・っ」

一方的にまくし立てる男の言い分がいい加減苛立ちが募り、鬼灯は反論する。しかし、瘦身の男は性感を狂わされた肌を撫で回され、快感で身体をヒクつかせる。

「見事な身体だな。色素沈着もないし、十代のガキみたいだ。敏感だし、抱かれるためにあるような身体だな」

同じ言葉を誰かに言われたような気がして、鬼灯の胸が不意に高鳴った。

「まあ、処女でもこれだけ小慣れていれば痛みもクソもないだろう。俺のモノで、信じられない絶頂を迎えさせてやるぜ」

そう言う男は手にローションを塗りつけ、左右に開かされて拘束された脚の間に手を差し入れ、秘孔に指を挿し入れた。

「んんっ・・・！」

散々この男に性感帯を狂わされ、身体は常に発情状態にあった。秘孔の奥の前立腺もかき乱され、指先が触れただけで重い快感が湧き上がってくる。

「はっ・・・はっ・・・ああ・・・」

「エロい声出しやがって・・・これからもっとアンアン啼けよ？」

胸の突起を押しつぶされ、上半身の快感が弾けて身悶える様を、男は楽しそうに眺める。

男の言葉に反抗したいところだったが、性感を狂わされた今の身体では、プロと称する色事師の前ではただ快感を感じることにしかできなかった。

秘孔を撫で回されながら、胸の突起に舌を這わされ、舌の技巧も生き物が動くように巧みで、鬼灯はその感覚に上半身を震えさせる。

「んんっ・・・くうう・・・っ！」

「感じてるな・・・乳首もエロいよな、たつぷり調教されてるみたいなのに、色が黒ずんでないのが不思議だぜ」

そう言う痩身の男は胸の突起を歯で軽く啣え、舌で先を上下に舐めながら歯を左右にずらして擦り始める。

「あっ！はああ・・・っ！」

胸の絶頂の水位が急速に上がり、鬼灯はその熱に声をあげる。このまま続けられたら、間違いなく絶頂してしまうほどの激感に、上半身どころか下半身にも快感が伝播してしまう。

「おら・・・もっと啼け・・・気持ちいいんだろ・・・？」

(くっ、こ、こいつっ・・・！)

一瞬鬼灯の心に反骨芯が沸いたが、身体に受ける快感ですぐにそれは霧散してしまう。性感帯を触られれば誰の指でも感じてしまう因果な鬼灯の身体だが、この男の指使いはまるで違い、思わず涎が垂れそうな愉悦が次々と湧き上がり、その快楽に耽溺してしまうような危ない誘惑がある。

「まだまだ遊びたいが、時間が無えからな・・・そろそろ抱いてやるぜ」

そう言って瘦身の男が鬼灯の身体から一瞬離れる。ズボンをおろし、下着も降ろして雄を露出させる気配がする。快楽で霞む頭をもたげてその下半身を見ると、そこには禍々しいほど赤黒く太く長い剛直があつた。

「い、いやだっ！あっ！あぐっ・・・！」

あまりの迫力に鬼灯が拒否の声をあげたが、自身を握られて再び頭が快感に支配される。

「くく、最初はみんな俺のモノをみてビビるんだ・・・。でも、挿れられたら、態度が豹変するよ。ほら怖がるな。優しくしてやるよ。なんせ処女だもんな」

そう言って男が舌なめずりすると、爬虫類のような目で鬼灯を見おろし、両足の拘束を解いて自由にさせたが、すぐに膝裏をとらえて動きを止め、さらに身体を折り曲げて臀部を突き出す格好を取らせる。すかさず秘孔に剛直の先端が当てられ、鬼灯がその感覚に身体をヒクつかせた。

（中略）

「まだ、私はイッてないですよ？ほらほら・・・」

しかし男がどう操作しても、鬼灯は目覚める気配がなかった。上気した頬に涙の跡を行く筋も伝わせて、絶頂に苦しんだ表情のまま気を失っている。

「完全に気絶しちゃったね・・・大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ。おそらく、彼の体力に限界がきたのでしょう。少し休ませれば、また良い反応をかせすようになります」

痩身の男にそう言われ、男たちは安堵のため息を吐き、また鞆から怪しげなアンプルを取り出した。

「これはわが社で内密に研究していた商品でね・・・。身体の末端神経が、全て性感帯になるという、エロの極致と言える薬だ」

「相変わらず、小谷さんの会社はマッドサイエンティストが多いですな」

「もしかして、それを加々知くんに使うつもりですか？」

男がアンプルを指さして不安そうに尋ねた。

「まあ、そうしようかな、と思うんだけど……。大丈夫、解毒剤はもうすぐ完成する予定らしいから、打っても大丈夫だよ」

「未完成って、危なくないですか？もし失敗したら、いつまでも加々知くん、全身性感帯ですよ？」

「まあ、そうなんだが……。そこは我々が面倒を見てあげようじゃないか。それに、なんだかこの子は、どこまでも追い詰めたくなる欲をそそるんだよ……」

アンプルを握った男が不穏な目つきで眠る鬼灯を眺め、それに同調したのか、男たちもそれ以上反論しなかった。

（中略）

（うう・・・ダメだ、集中できない・・・）

PCに向かってキーボードを打つが、普段の三分の一も作業がすすまない。時間だけが漠然と流れ、無駄打ちばかりを繰り返す腕の筋肉は張りつめ、頭が重くなってくる。

いや、それ以上に下半身の疼きが無視できないほどに激しく、鬼灯は射精への欲求を制止するのに精いっぱいだった。

さらに、それに追い打ちをかける身体中の感覚。

早朝から男共に汚され、身体を洗浄し、着せられたスーツ一式は上等なものだったが、そんな事とは関係なく、シャツの肌触りだけで身体がぞくぞくと感じてしまい、鬼灯の絶頂欲求に拍車をかける。

「く・・・はあ・・・」

口元に手を当てて、誰にも聞こえないように吐息をつく。

鬼灯は気付いていないが、数人の男女社員が鬼灯の顔が紅潮していることに気づき、色づいたその顔へチラチラと目を向けようとしている。

「加々知くん・・・」

「あ、はい・・・」

振り返った先に尾畑が佇み、目が合った瞬間、彼女は見てはいけない物を見てしまったかのように慌てて目を逸らせ、そのままの首の傾きで鬼灯へ言葉を続けた。

「どこか身体の調子悪いんじゃない？顔が赤いし、仕事もすすんでないみたいだけど・・・」

「はい、すみません。どうも・・・風邪をひいてしまったようです。感染するかもしれませんから、あまり近寄らない方が良いでしょう」

口元を抑えながら鬼灯は尾畑にそう話しかけると、再びPCへと顔を向けた。気を引き締めておかないと顔が快感で緩みそうで、そっけない態度になってしまう。

鬼灯はこれが普通なので周囲は特に気に留めた様子もないが、鬼灯の仕事が急激に遅くなり、立ち上がるのも辛そうな様子には気を配っているらしく、いつもの鬼灯を頼る呼び声もあまり聞こえない。

そんな中、鬼灯のスマホが震え、その振動で鬼灯は一瞬身体を縦に震わせ、椅子を鳴らしてしまう。一瞬周囲の視線が集中したが、鬼灯が無視すると視線は霧散した。

着信があった。そこには見覚えのある名前がある。

いつの間にかスマホに登録されたらしく、男たちのアドレスや番号が光る画面に映し出されていた。

（中略）

「ふふん、可愛い声が出たね。そんなに感じるの？」

白澤の指は鬼灯の白シャツにかかり、ボタンを中ほどまで外して胸を露出させ、直接性感帯に刺激を送り始めた。

「んっ・・・！だめ、ああ、あっ・・・！」

ゾクゾクと止めようがない快感がせりあがり、鬼灯は両足をバタつかせて抵抗の意思を示したが、両足の間には白澤の膝が入り込み、その根元を刺激し続けるので、下半身も快楽でトロカされ始める。

「人間の姿のお前が乱れる姿、凄く新鮮。髪の毛切ると幼くなるね、お前。なんかイケナイことしてる気分になってくるよ」

「はっ・・・数億年ジジイが、今更背徳感など皆無でしょうがっ・・・」

それもそうだけど、と白澤は言い置いて、鬼灯の肌直接接触してさぐるように撫で回す。

「妙な薬使われてるね……。四六時中発情状態にさせられる、危険な薬だ……」

「んっ……発情など……」

「何人に犯された？」

唐突な白澤の質問に鬼灯は当惑したが、すぐに彼らしい返答で切り返した。

「言う必要はありません」

「いや必要あるよ。でなきや、治療しないよ？」

これだから、白澤に今の症状を知られたくなかったのだ。閻魔大王に調子がおかしいから白澤の元で治療してこいと念を押され、顔を見せるだけで去ろうとしたものを、ズルズルとベッドにまで誘導され、体中を撫でられてしまっている。

「確かに複数によつてたかつて触れられましたが、どうということはありません」

「ふーん・・・どうということはない、ねえ・・・」

再び白澤の顔に昏い影が落ちる。こういう表情をするときは、不穏な雰囲気が高い、結果鬼灯の好む方向へは働かない。

言うのではなかった、と今更後悔しても遅い。鬼灯はうかつだった自らの言動を悔いながら、白澤の下からも逃れられず、次にされる暴挙を待たなければならなかった。

白澤の繊細な指が鬼灯の胸の突起にかかり、痛みを感じるギリギリのところまで強く掴み上げられた。

「あああつ！」

これまでの調教ですっかり敏感になってしまい、薬の回った身体にその刺激は強烈すぎて、鬼灯はすぐに絶頂寸前にまで引き上げられてしまう。

「もうイキそうなんだ・・・どんだけエロいんだよ。相変わらず、周囲をタラシ込むのがうまいね」

「た、タラすなど・・・！」

鬼灯は決して色仕掛けなどで相手を惑わそうなど考えないし、自分にそこまでの色香があるとも思わない。

しかし、鬼灯は良く言い寄られ、身体を求められる。

仕事のできる、いけ好かない自分を性的に服従させたいという気持ちがそうさせるのだろう、と鬼灯は解釈しているが、その話をする、白澤はいつも不機嫌になる。

「お前、もうスーツ姿で現世で働くの禁止ね」

「はあ？何を言ってるんですか」

唐突な白澤の命令に鬼灯は若干苛立ちながら反論した。

「こんなヤツがふらふらオフィスを歩き来したら、誘ってるようなもんだよ。相変わらず自覚がないね・・・これまで、散々お前に教え込んできたのに」

教え込んできた、と言う言葉に尋常ならざる気配を感じ、鬼灯は白澤の顔を見上げた。

影になっ
ていては
つきりと
した表情
は見えない
が、不
穏な雰
囲気をひ
しひしと
感じる。

続きは製品版でお楽しみください

